

自分の夢を実現できた多摩大学

経営情報学部4年 井上 祐輝

小学6年生からスピードスケートを始めたのは、それよりも前の2006年トリノ冬季オリンピックで、フィギュアスケートの荒川静香さんが金メダルを獲得したのをTV観戦したのがきっかけでした。はじめはフィギュアスケート教室に通っていましたが、もっとスピードを感じる競技がしたいと思い、母にスピードスケートのクラブを探してほしいと頼み、東京では数少ないスピードスケートを指導してくれる柏原幹史監督と出会うことができました。柏原監督はショートトラックの有名選手を何人も育てた、日本でも有数のオリンピック監督です。それにも関わらず、自分のような初心者でも熱心に指導してくれる、心技体全てにおいてトップの指導者でした。学業とスケートの両立は大変で苦しい時期が何度もありましたが、柏原監督の指導の下何とか乗り越え、来年3月には10年余りの選手生活を全うしつつあります。

自分は高校生の時、ずっと続けてきたスピードスケートを大学でも続けインカレに出場したいという夢を持っていました。それはクラブの先輩選手が皆、大学の名前を背負い活躍していたのを見ていたからです。そして、スピードスケートのクラブがある大学を受験しました。ところがその大学は、今後は日本代表以外の選手は取らないという方針だったため、自分は見事その大学を落ちてしまいました。呆然としていたところ、高校の先生から多摩大学という、君の今までを評価してくれるいい大学があると勧められ、AO入試で無事合格し、晴れて大学生になることが出来ました。

入学式の日、多摩大学は自分がスピードスケートでインカレに出場したいと願い出たら、許可してもらえるだろうかという思いを持ち、列席しました。入学式会場で1年生ゼミ担当の金美徳先生に伺ったところ、さっそく杉田文章（現学部長）先生をご紹介いただきました。先生は大変熱い方で、大歓迎である頑張ってくださいと背中を強く押してくださいました。顧問は飯田健雄先生が受けくださり、学生課も含めた全面協力の中、体育会スケート部を設立し、スピードスケート選手としての大学生活が始まりました。

多摩大学は実学が基本方針で、韓国へのアジアダイナミズム研修や、アクティブラーニングとして体育会の運営や活動を報告できたり、講義・講師陣も多彩でゼミも楽しく、大学の勉学については中学・高校よりも文武両道をするモチベーションを前向きに保つことができました。大学1年生のインカレでは、得意の1500Mで自身としては満足いく成績を出し、今まで出場することの出来なかった全日本選抜選手権にも出場を果たし、絶好調を迎えました。しかしながら、この冬、合宿中に足首を骨折してしまい、全治までの3カ月間、トレーニングができない状況に陥りました。大学2年生の春からトレーニングを再開しましたが、それ以前の調子にはなかなか戻らず、2年生はつらい年度となりました。クラブでは平昌オリンピックへ向けて、先輩選手が自分

を追い込むトレーニングに躍起です。自分は少し置いていかれた気持ちのまま、2年生のシーズンは大した進歩も出来ず終了しました。そのような中でも、多摩大学での友人との楽しい学生生活が自分の唯一の救いでした。

意気消沈している自分をもう一度奮い立たせてくれたのは、平昌オリンピックのショートトラック競技で活躍した先輩選手でした。オリンピックに向け過酷なトレーニングを続けてきた先輩はオリンピック後には、引退するだろうと思われていたのですが、オリンピックが終わってみると来年度の選手生活について、再考するようになったと言うのです。先輩からは、「今の気持ちに正直に、続けて頑張っていこうという気持ちがあるならその気持ちのまま行動したらいい」とアドバイスをもらいました。また、厳しいトレーニングからともすると逃げたくなる自分に、監督からの「大学に入って選手をすると決めたのだから最後まで頑張るんだ」との言葉は、自分の迷いが吹き飛び、はっと目が覚めたような思いになったのを今でもはっきり覚えています。

迎えた大学3年生のシーズンは力のある先輩選手がたくさん引退し、厳しいトレーニングを続けるモチベーションを保つため、自分自身との闘いとなりました。2年生を中途半端なトレーニングで過ごしてしまった翌年のシーズンで、調子を上げていくことは大変困難でしたが、この時自分のショートトラックの競技経験は9年目を迎えていたので、大会では不思議と自分のレースをすることが出来るようになっていました。この経験は自身の競技成績では顕著な成果は出せませんでした。この年の冬、国体の成年男子リレーに、東京都代表選手として出場し、チームワークを乱すことなく自分なりの滑りができ、なんと第2位に入賞することができたのです。その時、スポーツは続けることに意味があるのだということに気づきました。チーム全員で喜びを分かち合ったことは忘れられない思い出です。

今、このような環境を与えてくださった多摩大学、熱い思いで応援してくださった杉田文章先生、飯田健雄先生、一人一人の輝きに眼を向けてくれた中村その子先生、遠いリンクまで応援に駆けつけてくれた学生課の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。大学での選手生活も残すところあと半年となりました。最後まで悔いのないよう頑張っていきます。そして多摩大学での4年間は今後の自分の人生に大いに役立っていくことを確信しています。



国体2位入賞



留学生送別会

経営情報学部学生会執行部長 3年 田島 凜太郎

2019年7月25日に学生会執行部主催の留学生送別会を4階学生食堂にて開催しました。留学生や先生方、多摩大学の一般の学生を含めると30人を超える方に参加して頂くことが出来ました。当日は、水盛涼一先生によるご挨拶から始まり、留学生と教員、学生によるお食事会、多摩大ミニクイズ、修了証授与、集合写真と進み、最後は大森拓哉先生のご挨拶で締められました。

お食事会では、留学生と教員、学生が交流し、多摩大学で学んだことや、日本での生活など様々なことを話せる良い機会となりました。また、多摩大ミニクイズでは、最後に多摩大のことを知ってもらえたと思います。参加して頂いた留学生はとても満足そうにしていました。また、一般の学生も留学生と交流することで異文化交流が出来る良い機会になったと思います。

なかなか、学校生活の中で留学生と交流する機会が少ない中で、今回の留学生送別会を通じて留学生と一般の学生が交流する機会を作ることが出来たのは、学生会執行部としてとてもうれしいことだと思います。



七夕

2019年7月1日から7月7日までの7日間、学生会執行部は学生に日本の文化を体感して頂くと同時に学内に季節感を感じて頂くため、学内に笹や短冊、笹飾りを設置しました。また、同時に学生に最新の技術を体感して頂くという目的で、SNSを使い、笹を撮影し画像と共にハッシュタグを付け、投稿することで素敵なプレゼントをもらえるというイベントを開催しました。

短冊に学生がお願い事を書けるようにブースを作りました。その結果多くの学生が短冊にお願い事を書いてくれました。学生会執行部が当初想定していた数の倍以上の学生が短冊にお願い事を書いてくれたので、笹は多くのお願い事で埋まりました。SNSにも多くの学生に投稿して頂きました。学生会執行部として、今回の七夕は多くの学生に日本の文化や最新の技術、季節感を学内で体感して頂く良い機会になったと感じています。



自分を変えた留学

英語が好きだということ、高校の修学旅行でオーストラリアに行った際、思うように英語が喋れず悔しい思いをして、大学では留学をしたいと思っていたこと。私がSGSを選んだのはそんな単純な理由でした。1年時、単位こそ落としてはいませんが、正直なんとなく過ごしていました。ただ3月に1週間の短期留学でシンガポール、5月に韓国へ1週間、それぞれ大学のプログラムを利用して行きました。これらの留学がとても充実していて、この2カ国に行ったことで授業に対するモチベーションも変わっていき、徐々に観光にも興味を持ち、2年時からはホスピタリティ・マネジメントコースを選択しました。そして短期留学に行ったからこそ、入学した理由の1つでもある1年間の留学を決意できました。

1年間の留学はニュージーランドワーキングホリデービザを使用し行きました。やはり1年という期間は長く、今までの中で1番成長できた濃い1年間でした。語学力はもちろんのこと、内面的にもかなり成長できたと自負しています。ニュージーランドでは最初3ヶ月はホームステイをしながら語学学校に通い、友達を増やしつつ、英語力を磨きました。卒業後はホームステイ先を出て、ルームシェアを始め、レストランでフルタイムの仕事を始めました。仕事を見つけることがとにかく大変で、日本人ということだけで弾かれることが多く、メールの返事も来ず、面接すらしてもらえないこともしばしば。履歴書は30社ほど送りました。何度も投げ出して日本に帰りたいと思いました。ただ昔から1度決めたことは曲げない質なので、そこはルームメイトや語学学校の友人

グローバルスタディーズ学部4年 福沢 健太

や先生などにアドバイスを貰いつつ、助けられながら仕事探しを続けました。その努力が実り自分の納得のいく就業先につくことができました。ですが日本ではレストランでのアルバイト経験はなく、ましてや接客もメンバー間での会話もすべて英語。こんなうまくいく訳ありません。今思えばよく続けられたなと思います。ただ現地の方はとても優しく私が理解するまで何度でも繰り返してくれました。なので私も積極的に話すことができ、焦ることなく仕事ことができました。そして数カ月後には常連のお客さんにも覚えていただくようになり、仕事にも慣れ、他店舗にヘルプとして行くまでになりました。まだ書ききれてないことが山程ありますが、とにかく学校も仕事も遊びも本当に充実した1年間でした。余談ですが、留学から帰ってきたあとFacebookの友達が100人以上増えていました。

ほぼほぼニュージーランドの話になってしまいましたが、それほどこの経験が私の中で大きいものであるということです。帰国してから現在まで居酒屋でアルバイトをしています。もともとそこまで人と話すことが得意ではなく、内気な性格で留学以前はスーパーの品出しなど人と関わる仕事はなるべく避けていたのですが、今では居酒屋アルバイト。これも留学して人と話すことがとても楽しいと感じて、接客業にも興味を持ったからです。今は居酒屋アルバイトとしてとても楽しく働いています。そして4月からは商社で働きます。海外の方たちと関わる機会も増えるので留学と、大学生活で学んだ知識を活かし働くのがとても楽しみです。



シンガポール留学



韓国留学

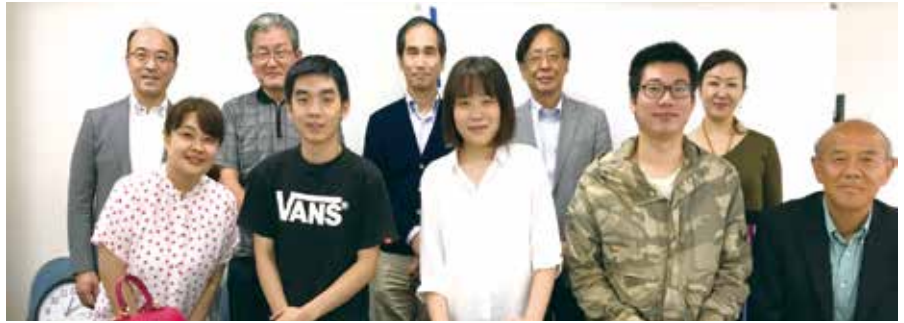


ニュージーランド留学



留学生対象の書き方講座

2019年7月16日、樋口裕一 多摩大学名誉教授を学院長として、来秋、北八王子に開校する日本語学校にて、「就職・大学院進学のためのエントリーシート、研究計画書の書き方講座」が実施されました。この講座は多摩大学経営情報学部と日本語学校が主催するもので、当日は多摩大学の留学生3名が参加し、それぞれの目標に合ったきめ細やかな指導を受けました。本講座は、留学生の就職支援の一環として、年数回開催される予定です。



〈グローバルスタディーズ学部〉 留学生送別会

2019年7月17日、今期で留学を修了するグローバルスタディーズ学部留学生の送別会を開催しました。日常より学内で頻りに交流を重ねているため、日本人学生と留学生は非常に仲が良いのが本学部の特徴です。授業の準備やレポートの共同作業、お互いの言語を相互に教え合うなど非常に有意義な時間を過ごしていました。留学修了に伴い帰国しますが、学生たちは再会を約束していました。



〈グローバルスタディーズ学部〉 中国昆明・上海研修（協定校：雲南大学滇池学院にて）

昨年度に引き続き、本年度も2019年8月20日～8月26日に中国昆明研修を実施しました。藤沢市の姉妹都市であり本学とも縁がある昆明市を舞台に、現地大学生との交流、企業見学、2020年オリンピック・パラリンピックの紹介プレゼンテーションなど、濃密な研修を積極的に行いました。

雲南大学滇池学院では、雲南の少数民族料理にご招待いただきました。その後は日中両国の大学生がいくつかのグループとなり、学生生活など日中両国の事情を紹介し合い、相互理解を深めました。また、日本語を学ぶ中国人学生に対して、浴衣や遊行寺盆踊りを体験していただきました。中国の学生からは、藤沢市と昆明市が姉妹都市提携する契機となった聶耳（ニエアル：1912-1935年）の紹介や、月餅に関する故事の紹介、そして試食会など、中国の歴史や文化に触れる機会を提供していただきました。

さらに、雲南日本人会西澤会長のご協力により、光学機器工場を訪問しました。また、アジア最大規模の花市場を訪問し、花の競りを見学しました。オリンピック・パラリンピックの紹介に関しては、学生各自が積極的に発表準備に向き合い、2回にわたって英語でプレゼンテーションを行いました。

研修後半では舞台を上海に移し、アジア有数の経済金融都市の姿を体で感じつつ、外灘や上海ディズニーランドなどを見学して、無事に一週間の研修を終えました。学生達はキャッシュレス化の進展など中国経済の勢いに驚いたようで、今後も5Gの発展がもたらす経済社会のさらなる変革について注視したいとの感想を抱いていました。

